

研究代表者 所属・職：国際福祉開発学部・教授

氏 名：吉村 輝彦

研究課題名：多様な主体の連携による団地再生に向けたコミュニティビジョニングの実践
～知多市朝倉団地周辺地区を対象に～

研究の目的

- 2017 年度地域課題解決型研究「食を媒介とした対話や交流の場づくりから始めるコミュニティづくりの実践的研究」を知多市朝倉団地周辺地区で実施した中で、食を媒介とする対話や交流の場づくりの意義が関係者間で共有され、多様な主体の連携による団地再生への関心が高まってきた。
- 本研究では、知多市朝倉団地周辺地区をフィールドに、多様な主体によりこの地区の今後の方向性を構想し、コミュニティビジョニングという実践的な取り組みを通してアクションプログラムを策定・実施する。さらに、こうしたアプローチの可能性や課題を明らかにしていく。

プロジェクト目標の達成状況・成果内容

- 自治会及び団地居住者（日本人及び外国人）、UR 都市機構関係者、知多市役所各課、知多市社会福祉協議会、NPO/NGO、民間企業、大学関係者等、団地に関わる多彩な関係者（ステークホルダー）が互いの存在や活動を知るための場づくり（プラットフォームづくり）を行い、関係づくり、情報共有や交換（対話や交流）を積み重ねてきた。
- 並行して、団地や地域住民の想いを大事に紡いでいくために、様々な機会を活用して、（柔らかく）アウトリーチを行い、丁寧なつぶやき拾いを繰り返してきた。
- 地域の多彩な主体との協働による実験的アクション（事業）を展開していくことこそ意義があるため、プロセス当初から明確なゴールを設定せず、多様な主体による話し合いの中で、方向性や具体的な進め方を決めていった。単なる「協力」ではない、自主的な役割分担が自然な

形でなされた。

優れた成果があがった点

- 小さなアクションを積み重ねつつ、取り組みへの人々の関わりやすさやその成果の見える化が重要であるため、プロセスを大切にしてきた。多言語ちらしの作成やロコミ等で伝わった“「地域づくり」に誰もが関わっていくことができる” “自分がしたいこと（できること）をやっていくことができる” というメッセージは、外国にルーツのある青年や子ども、不登校の生徒等が気軽に参加することにつながり、地域の有力な担い手発掘や次世代への想いの継承にもなると考えられる。
- プラットフォームを通じて、それぞれの組織や団体における既存の取り組みだけでは解決につながりにくい課題の存在や新たな場の必要性、それを創り出す意義が幅広く議論され、自然な形で多面的な実践へと結びついた。
- 多世代及び多文化の住民や関係者の交流を行う中で、相互理解が促進され、新たな関係性が構築されていくとともに、団地の暮らしをより良いものにするための「コミュニティビジョン」が協創され、共有されていった。
- コミュニティプレイスとしての「朝倉団地センタープレイス」の使い方のあり方、作り方、そして、ルールづくり等の検討では、話し合いを通じて、より多くの人を巻き込みながら、取り組みの波及性や持続性を見極め、ブラッシュアップしている。結果的に、「センタープレイス」での取り組みの豊富化が想定を超える形で生まれつつある。
- プラットフォームやアウトリーチを通して、多様で多彩な多世代の人々がゆるやかに交じり合

い、想いをやわらかく共有しながら、役割を創出していくことができた。様々な人の出番を増やししながら、担い手を育んでいくこと、また、それぞれの関心や得意技を引き出しながら、力を発揮していくことにもつながっており、この取り組みを通じて、地域共生（社会）づくりへの関わりのきっかけとなった。

研究期間終了後の今後の展望

- 現在、買い物弱者への支援策等、民間企業を含めた意見交換がなされていることから、「センタープレイス」を活かした新たな取り組みへの発展が見込める。
- 本学学生の団地内居住の動きも進行しており、地域における活動への寄与や「センタープレイス」での活動を越えた次なる実践への展望が見えつつある。
- これまでの取り組みを通じて、「センタープレイス」が、朝倉団地に留まらず、つつじが丘地区全体の資源や拠点へと進む可能性がある。
- 既存の枠組みに依拠するだけでなく、今後従来とは異なる仕組みや仕掛け（マネジメントを含めて）を構築していく新しい研究のフィールドとして、今後も継続的に関わっていきたい。
- 知多地域にある大学として、地域をフィールドとした大学の関わり方のモデルとしても、成果を一層上げていきたい。